

宮城学院女子大学構内の爬虫類相[†]

Reptile fauna on the campus of Miyagi Gakuin Women's University

藤原愛弓*

Ayumi FUJIWARA

The purpose of this study was to investigate the reptile fauna on the campus of the Miyagi Gakuin Women's University and to evaluate the natural environment of the campus as a reptile habitat.

The survey was conducted from April to October 2020, and recorded the reptiles found by walking along the forest roads, the forest edge, the riverside flowing through the campus, and the roads on the campus.

A total of 6 native reptiles (*Takydromus tachydromoides*, *Achalinus spinalis*, *Euprepiophis conspicillatus*, *Elaphe climacphora*, *Amphiesma vibakari*, *Rhabdophis tigrinus*) designated as important species for conservation by Sendai City were recorded. Among them, *Achalinus spinalis* described as "Out of Data (DD)" in Red Data List for Miyagi Prefecture 2016 has not been found in Marutazawa area including the University campus. In this study, four individuals of *Achalinus spinalis* were discovered from felled trees and fallen trees of broad-leaved trees cut for forest management in the University campus.

In addition, since juveniles of these reptiles were found, it is possible that they were breeding in and around the premises and that they were changing generations. Since these reptiles are considered to have low mobility and to be susceptible to human-induced changes in the natural environment, it is important to maintain the current natural environment on the premises and continue appropriate forest management for the sustainable inhabitation of native reptiles at the University campus.

Keywords: biodiversity, ecosystem, forest management

生物多様性、生態系、森林管理

1. 緒言

宮城学院女子大学のキャンパスは、1973年に宮城県により指定された、総面積124haの丸田沢緑地環境保全地域（以下、丸田沢地域）の一部に含まれる。仙台市の青葉区と泉区にまたがる丸田沢地域は、1960年代以前は奥羽山脈から連なる森林域であったが、その後周辺地域の宅地開発が進み¹⁾、現在は市街地に囲まれ残存した池沼を含む自然緑地・公園としてきわめて貴重な存在となっている¹⁾。本学を含む丸田沢地域は、モミの大木をふくむアカマツの自然林や、コナラ等から成る二次林が存在し、かつて農業用として用いられた丸田沢堤（溜池）に隣接しており²⁾、野生動植物の生息地としての重要な機能を持つとされる²⁾。例えば、本学キャンパスにおける最近の研究から、ミツバチ等のポリネーターが採餌可能な多様な野生植物が季節を通じて生育・開花すること³⁾、環境省と宮城県のレッドデータブック（以下、RDB）に準絶滅危惧（NT）として記載されているトウホクサンショウウオが生息すること⁴⁾が報告されているが、他の多くの生物種については本学構内における生息状況が明らかになっていない。

本学を含む丸田沢地域は、宮城県の指定緑地としては小規模であり¹⁾、且つ宅地や道路等により大規模な緑地と分断され孤立している。そのため、移動能力の低いとされる爬虫類等の生物にとって、本学を含む丸田沢地域は、仙台都心部における生息地として重要であると考えられる。20年以上前に丸田沢地域を対象に実施された生物相の網羅的な調査では、計6種の爬虫類（外来種のミシシippiaアカミミガメ、在来種のニホンカナヘビ、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリ、ヤマカガシ）が確認されている⁵⁾。しかしこの調査の際、本学のキャンパスは対象地に含まれておらず、本学構内における爬虫類の生息状況はこれまで明らかにされていない。本学キャンパスに生息する爬虫類相の把握は、構内における在来種爬虫類の持続的な生息のための基礎的な情報を得るために重要である。そこで本研究では、本学キャンパスに生息する爬虫類相を明らかにすることを目的とした。また、得られた結果に基づき、爬虫類の生息地としての本学の自然環境について考察を行った。

*宮城学院女子大学 生活環境科学研究所 ミツバチ科学研究部門

[†]2021年1月12日受付, 2021年2月9日受理

2. 方法

本学構内において2020年4月から10月まで約1週間に1~2度の頻度で、爬虫類相の把握のための野外調査を実施した。調査は爬虫類の活動が不活発になる低温・雨天時を避け、本学構内の森林内やその中を通る遊歩道、構内を流れる沢沿い、構内を通る道路と道路脇の林縁を徒歩で踏査して爬虫類を探索した(図1)。なお、主な調査ルートは2019年の予備調査において爬虫類個体を目撃した場所をもとに決定した。また、本学構内ではマツ枯れ・ナラ枯れ等の対策や遊歩道の維持のため林内で時折樹木の伐採が行われており、これらの伐採木や強風による倒木等は遊歩道脇や林内の所々に積まれて置かれている(以下、集材)。爬虫類の中には、集材の下やその樹皮下に生息する種も存在するため⁶⁾、調査ルート付近にあるそのような場所では、可能な限り木や樹皮を持ち上げてヘビ類の有無を確認した。また、日本本土に生息するヘビ類には夜行性の種もいるため⁶⁾、気温が高く活動しやすいと考えられる7月~8月にかけて、夜18時~20時の間に構内の道路を歩き、懐中電灯等で照らしながらヘビ類の生息を調査した。

発見した爬虫類のうち、無毒の種は虫捕り網等を用いて傷つけないよう捕獲するか、ビデオカメラを用いて写真や映像を撮影し、その種名と個体数を記録した。体色や模様等の特徴により成体と幼体の区別が可能な種については、それらを区別して記録した。なお、有毒の種(ヤマカガシ)が発見された場合は、捕獲は行わずビデオカメラによる記録のみを行った。また、本研究の進行中に本学付属の森のこども園において、園の周辺で捕獲されたニホンイシガメを飼育していることが判明したため、本種を捕獲した場所や経緯についてこども園の職員である鶴川菜美氏から聞き取り調査を行ととともに、イシ



図1. 宮城学院女子大学構内における主な爬虫類の調査ルート(構内の森林内に設置された主要な遊歩道、構内を通る道路と道路脇の林縁)を黒いラインで示した。図は2016年大学要覧のキャンパスマップより作成。

ガメ個体を、許可を得てビデオカメラで撮影した。また、本学構内で森林や遊歩道の管理を行っている業務員数名に、これまでに遊歩道等で遭遇したヘビの種について記憶している範囲での聞き取り調査を実施した。

本研究により記録された爬虫類は、仙台市自然環境に関する基礎調査報告書²⁾を参照し、仙台市独自のカテゴリーである「保全上重要な種」として記載がある種については、基礎調査報告書に示されている基準に基づき「学術上重要種」、「減少種」、「環境指標種」のうち該当する項目を種ごとに記述した²⁾。

具体的には、これらの3つの分類について、基礎調査報告書を参照しつつ、「学術上重要種」として記載されている種は、1:仙台市において、もともと稀産あるいは希少である種、あるいは生息地・生育地がごく限られている種、2:仙台市周辺地域が分布の北限、南限等の分布限界となる種、3:仙台市が模式産地となっている種、4:1, 2, 3には該当しないが、各分類群において注目に値すると考えられる種のいずれかに分類した。「減少種」に記載されている種は、A:現在ほとんど見ることが出来ない、あるいは近い将来ほとんど見ることが出来なくなる恐れがある種、B:減少が著しい、あるいは近い将来著しい減少の恐れがある種、C:減少している、あるいは近い将来減少の恐れがある種のいずれかに分類した。なお仙台市では、「減少種」について仙台市環境基本計画2011-2020を基に、仙台市を5つの区画に分類し評価しているため²⁾、本学のキャンパス所在地が含まれる市街地地域の区画のデータを参照した。「環境指標種(ピオトープやミティゲーションにおける計画・評価のための指標)」に記載されている種は、本市の各環境分類における環境を指標する種とその指標内容を記述した。また、環境省版あるいは宮城県版のRDBに記載のある種については、その旨も記録した。

3. 結果

本研究により、イシガメ科のクサガメ *Mauremys reevesii* (外来種)、ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (移入種)、在来種ではカナヘビ科のニホンカナヘビ *Takydromus tachydromoides*、宮城県版のRDBに情報不足(DD, 評価するだけの情報が不足している種)として記載されているタカチホヘビ科のタカチホヘビ *Achalinus spinalis*、ナミヘビ科のジムグリ *Euprepiophis conspiciellatus*、アオダイショウ *Elaphe climacophora*、シマヘビ *Elaphe quadrivirgata*、ヒバカリ *Amphiesma vibakari*、ヤマカガシ *Rhabdophis tigrinus* が記録された。これらの計9種の爬虫類(表1, 図2)のうち、計4種(クサガメ、ニホンイシガメ、タカチホヘビ、ジムグリ)は、約20年前に実施された丸田沢地域の生物相調査では確認されておらず⁵⁾、本研究で新たに確認・記録された。

ニホンイシガメについては、森のこども園の職員に聞

表 1. 宮城学院女子大学構内で確認された爬虫類 9 種について、確認個体数、在来種・外来種・移入種のいずれに該当するか、宮城県版 RDB の該当の有無を示す。なお、確認個体数については 2020 年以前の予備的な調査や聞き取り調査で確認された個体も含めた。ニホンマムシは発見年月日、個体数、発見場所が不明であるため本表には記載しない。

科	属	種	学名	確認 個体数	在来/外来/ 移入	宮城県版 RDB
イシガメ科	イシガメ属	クサガメ	<i>Mauremys reevesii</i>	1	外来	
		ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i>	6	移入	
カナヘビ科	カナヘビ属	ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i>	5	在来	
タカチホヘビ科	タカチホヘビ属	タカチホヘビ	<i>Achalinus spinalis</i>	4	在来	DD
ナミヘビ科	ジムグリ属	ジムグリ	<i>Euprepiophis conspicillatus</i>	1	在来	
ナミヘビ科	ナメラ属	アオダイショウ	<i>Elaphe climacphora</i>	4	在来	
ナミヘビ科	ナメラ属	シマヘビ	<i>Elaphe quadrivirgata</i>	1	在来	
ナミヘビ科	ヒバカリ属	ヒバカリ	<i>Amphiesma vibakari</i>	3	在来	
ナミヘビ科	ヤマカガシ属	ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus</i>	1	在来	

き取り調査を実施し、以下のような回答を得た。2018 年 9 月に 3 個体、2019 年 4 月に 3 個体が本園の正面エントランス、南園庭、児童クラブの前で発見・捕獲され、これらの個体はいずれも体サイズの小さい幼体であった(図 2 1-1)。2018 年に捕獲した 3 個体と 2019 年に捕獲した 2 個体は、現在も森のこども園内の子育て支援室、児童クラブ、ひかり組保育室でそれぞれ飼育を継続している。本園エントランス向かいのテニスコート脇の草むらでは、白色の複数の卵の殻が発見されており、卵の大きさや産卵数から、ニホンイシガメの卵である可能性も考えられた。なお宮城県で確認されているニホンイシガメ個体は、飼育されていた個体が遺棄され野生化したものであると考えられている²⁾。

クサガメは、2020 年 6 月 26 日に丸田沢の溜池に接する陸地の落ち葉の下から、甲長約 3 cm の幼体 1 個体が発見され(図 2 1-2)、同時期に同場所で白色の卵の殻が複数発見された。クサガメは、以前は日本の在来種であると考えられていたが、現在は 18 世紀末に朝鮮などから移入された外来種と考えられている⁷⁾。また、飼育されていた個体が各地で遺棄され野生化しており、在来種のニホンイシガメとの交雑個体の発生⁸⁾による遺伝的な攪乱も問題となっている。

丸田沢地域の調査でも記録されたニホンカナヘビ(図 2 2)は、主に遊歩道の周囲において、2020 年 5 月 2 日に 1 個体、6 月 22 日に 1 個体、7 月 9 日に 2 個体、10 月 14 日に 1 個体の計 5 個体が確認され、4 月 26 日には、林床の朽ちた集材中に、本種の卵が複数個産みつけられているのが確認された。本種は草地によく生息し、都市部の公園や庭先などの日当たりのよい場所でみられるが⁸⁾、市街地において個体数の減少が認められており、仙台市における減少種(C: 減少している、あるいは近い将来減少の恐れがある種)、且つ環境指標種(低山か

ら平地・住宅地にかけての林や草むらの指標)として記載されている²⁾。

タカチホヘビは、2020 年 6 月 8 日に幼体 1 個体、6 月 20 日に成体 1 個体と幼体 1 個体の計 2 個体、7 月 3 日に幼体 1 個体の計 4 個体が発見された。全ての個体が、遊歩道の周囲に積んである集材の下、あるいはそれらの樹皮の中から発見された。本種が発見された木の樹種はコナラ、サクラ類であり、全て広葉樹であった。本種は自然度の高い林床を好むとされており、落ち葉や倒木の下、樹皮等に潜り主にミミズを捕食することが知られている⁶⁾。幼体・成体ともに特徴的な光沢のある鱗が体表を覆っており(図 2 3-1, 3-2)、幼体の時は、暗褐色に近い体色であるが、成体になると褐色になり、背中に黒いラインを有するようになる(図 2 3-2)。生息個体数は少なくはないと考えられているものの、夜行性且つ地中で生活することが多いため、姿を目撃される機会は少ない⁶⁾。本種は宮城県版の RDB に情報不足の種として記載されるとともに、仙台市における学術上重要種(1: 仙台市において、もともと稀産あるいは希少である種、あるいは生息地・生育地がごく限られている種)、且つ減少種(A: 現在ほとんど見ることが出来ない、あるいは近い将来ほとんど見ることが出来なくなる恐れがある種)として記載されている²⁾。

ジムグリは、2020 年 5 月 3 日、森のこども園に隣接する竹林において、頭部が欠損した幼体 1 個体の死骸が発見された(図 2 4-1)。本種の幼体は、成体よりも鮮明で目立つ体色をしている。食性は動物食であり、主にネズミなどの小型の哺乳類やトカゲ等を捕食する⁹⁾。本種は市街地で個体数の減少が認められ、仙台市における減少種(B: 減少が著しい、あるいは近い将来著しい減少の恐れがある種)、且つ環境指標種(森林の環境指標)として記載されている²⁾。

アオダイショウは、2020年9月18日の夜、本館隣の道路上において、幼体1個体を発見した(図2 4-2)。また、本学一般教育部の田中一裕教授により、2018年7月16日に森のこども園近くの道路脇の斜面において、アオダイショウの幼体1個体を撮影した写真記録の報告を得られたほか、2019年の予備調査では成体のアオダイショウが2個体確認された。本種は無毒蛇であるが、幼蛇は身を守るため有毒のニホンマムシに擬態しているとされる⁹⁾(図2 4-2)。平地から山地にかけての森林や畑地、民家の周辺などに生息し、樹上性の傾向が強い⁸⁾。近年、本種は市街地で個体数の減少が認められ、仙台市における減少種(B:減少が著しい、あるいは近い将来著しい減少の恐れがある種)、且つ環境指標種(低山から平地・住宅地にかけての良好な自然環境の指標)として記載されている²⁾。

シマヘビは、本研究の調査中には確認されなかったが、田中一裕教授により1999年7月19日に構内の遊歩道で本種1個体が目撃されている。本種は、森林、草地、河川敷など平野部から山地に至るまで様々な場所に生息し、ネズミ類、トカゲ類などを捕食する⁹⁾。仙台市の基礎調査報告書には保全上重要な種としての記載はない²⁾。

ヒバカリ(図2 4-3)は、2020年6月10日遊歩道において幼体1個体、8月10日に構内の森林を流れる沢付近で成体1個体を発見した。本種は平地から低山地にある森林域や水辺に生息する無毒蛇であり、カエルなどの両生類とその幼生、魚類、ミミズなどを捕食する⁸⁾。近年、本種は市街地で個体数の減少が認められ、仙台市における保全重要な種(C:減少している、あるいは近い将来減少の恐れがある種)、且つ環境指標種(森林の環境指標)として記載されている²⁾。

ヤマカガシは、2020年5月27日、本学構内の遊歩道脇に生育する樹木の根元で幼体を1個体確認した(図2 4-4)。本種は平地や低山地を中心に生息し、水田地帯や水辺に生息する有毒蛇であり、主にカエル類を捕食するとされる⁹⁾。本種の攻撃性はニホンマムシほど高くなく、咬傷例はほとんどが捕獲あるいは取り扱い中のものであるとされている¹⁰⁾。近年、本種は市街地で個体数の減少が認められ、仙台市により保全重要な種(A:現在ほとんど見ることが出来ない、あるいは近い将来ほとんど見ることが出来なくなる恐れがある種)、且つ環境指標種(水田の環境指標種)として記載されている²⁾。

4. 考察

4-1. 本学に生息する爬虫類

日本本土に生息する在来種のヘビ類は、タカチホヘビ、ジムグリ、アオダショウ、シマヘビ、ヒバカリ、シロマダラ、ヤマカガシ、ニホンマムシの計8種であるとされる⁶⁾。本研究により、そのうちの6種(タカチホヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリ、ヤマ

カガシ)の生息が確認された。また業務員への聞き取り調査から、年月日は不明であるが本学構内の森林で以前ニホンマムシを目撃したとの情報が得られた。これを加味すると、シロマダラ1種を除き、日本本土に生息する全てのヘビ類が本学構内で発見されたことになる。シロマダラは主に森林の林床を好む夜行性の種であるため、なかなか人の目に触れることはないとされる。今回の調査では確認されなかったものの、引き続きシロマダラの存在についての調査を継続している。

トカゲ類は、構内においてニホンカナヘビのみ生息が確認された。一方で年月日は不明であるものの、一般教育部の田中一裕教授からヒガシニホントカゲの目撃情報が得られ、少なくとも以前は本種が本学構内で生息していたと考えられる。本研究ではこの1例以外目撃情報が得られなかったため、本種の生息個体数は多くはないと考えられる。

クサガメとニホンイシガメの2種のカメ類については、いつ、どのような経緯で宮学のキャンパスに生息するようになったのか、現時点では不明である。今後も継続して情報を収集し、クサガメやニホンイシガメが本学で生息することになった経緯や生息する個体数を明らかにしていく必要がある。

4-2. 本学における在来爬虫類の生息環境とその保全に向けて

本研究では、仙台市により保全上重要な種²⁾に指定されている計6種の在来種の爬虫類(ニホンカナヘビ、タカチホヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、ヒバカリ、ヤマカガシ)が確認された。特に、宮城県版のRDBに情報不足として記載されているタカチホヘビは、青葉山、向山などで生息が確認されているが、丸田沢地域での発見報告は著者が知る限りこれまでにない。既存の研究から、タカチホヘビの生息に適する環境条件として、堆積した落ち葉などからなるリター層が深く形成され、軟らかい土壌があり、谷からの距離が近く、コンクリート擁壁の面積が小さい環境であることが重要とされている⁶⁾。本学でタカチホヘビが発見された場所はいずれも、それらの条件に当てはまる環境であった。本種の保全上の観点から詳細な場所は記さないが、本研究におけるタカチホヘビの発見場所は近接しており、同じサクラ類の倒木から2個体が同時に発見され、他2個体も先の個体の発見場所からそれぞれ100m以内、300m以内の範囲のコナラの伐採木から発見された。これらの集材は、林内の湿潤な環境下で腐朽が進んでいると考えられ¹¹⁾、タカチホヘビが発見されたのも、そのような腐朽が進み柔らかく湿った集材の中であった。また、それらの集材には材中にミミズ等が入り込んでいるものが多かった。タカチホヘビは、ミミズを主な餌としており乾燥に弱い⁶⁾、本種にとって、本学林内の集材が重要な採餌・生息場所

(ハビタット)として機能していると考えられた。

既存の研究からも、森林生態系において枯死した倒木や切り株等の木は多様な生物の生息場所として、生物多様性の維持に重要な役割を果たすことが指摘されている¹¹⁾。本学の林内でも適度な伐採等の管理が行われることで、その材を利用する多様な生物が集まり、本種の採餌や生息に適する環境が維持されている可能性がある。

本研究で発見された在来種のヘビ類は、いずれも幼体を確認されており、ニホンカナヘビでは構内の森林に点在する集材の中に複数個の卵が確認された。トカゲ類の移動分散距離は、既存の研究で50 m程度であることが示唆されている¹²⁾。ヘビ類は移動分散距離について不明な点が多いものの¹²⁾、地上徘徊性の爬虫類は一般的に移動可能距離が短いとされ、周囲を道路や住宅地等に分断されている本地域からの移動は困難であると考えられる。そのため、保全上重要種に該当するこれらの種は多くが、本学構内あるいは本学を含む丸田沢地域で繁殖し、世代交代している可能性が考えられる。

また爬虫類は、昆虫類、鳥類、小型の哺乳類等をはじめとする様々な生物を餌資源として利用する捕食者であるため、その持続的な生息のためには多様な生物が生存できる環境が必要である。予備的な生物相の調査(藤原 未発表データ)により、本学の構内では、ニホンカナヘビの餌となるバッタ類等の昆虫類・クモ類や、ヘビ類の餌となるミミズ、両生類⁴⁾、爬虫類、鳥類、ネズミ・モグラ類等の生息が明らかになりつつある。そのため、宅地開発により本地域が大規模な森林域から分断された後も、これらの爬虫類は餌資源を得ることができ、本学構内で継続的に生息していると考えられる。なお、今回の研究では爬虫類の定量的な個体数調査は実施しておらず、限られた面積の本学構内に、どの程度の個体数が生息するのかは不明であり、それらの保全に必要な情報を得ることは今後の課題である。爬虫類は、自然環境の人為的な改変の影響を受けやすいとされるため¹³⁾、今後もキャンパス内の森林環境を大きく改変せず、これまでと同様に適度な伐採等の森林管理を継続していくことが、持続的な生息にとって重要であると考えられる。

5. 謝辞

本研究の実施にあたりご協力をいただきました、本学・ミツバチ科学研究部門の渡邊誠教授、山口喜久二教授に深く御礼申し上げます。また、本学構内における爬虫類の目撃情報等の提供にご協力いただいた、一般教育部の田中一裕教授、森のこども園の鶴川菜美氏をはじめとする職員の皆様、本学の業務員の皆様に心より御礼申し上げます。

6. 引用文献

- 1) 大柳雄彦, 平吹喜彦: 丸田沢緑地環境保全地域の植物相, 丸田沢緑地環境保全地域学術調査報告書, pp3-34 (2000)
- 2) 仙台市環境局環境部環境共生課: 平成28年度仙台市自然環境に関する基礎調査報告書 (2016)
- 3) 藤原愛弓, 山口喜久二: 宮城学院女子大学における開花植物の季節的推移: 大学構内におけるミツバチの蜜・花粉源植物の調査, 生活環境科学研究所研究報告 52, pp19-24 (2020)
- 4) 藤原愛弓: 宮城学院女子大学構内における準絶滅危惧種トウホクサンショウウオの産卵地の発見と個体数の推定, 宮城学院女子大学研究論文集 130, pp47-57 (2020)
- 5) 小山均: 丸田沢緑地環境保全地域の動物相, 丸田沢緑地環境保全地域学術調査報告書, pp127-178 (2000)
- 6) 山崎陽平: タカチホヘビ (*Achalinus spinalis*) とシロマダラ (*Dinodon orientale*) の自然史・生態・保全, 帝京科学大学大学院理工学研究科 博士論文, p109 (2018)
- 7) Suzuki D, Ota H, Oh H, Hikida T: Origin of Japanese population of reeve's pond turtle, *Mauremys reevesii* (Reptilia: Geoemydidae), as inferred by a molecular approach, *Chelonian Conservation and Biology* 10(2), pp237-249 (2011)
- 8) 吉川夏彦: 自然教育園に生息する両生類・爬虫類, 自然教育園報告 51, pp19-26 (2019)
- 9) 鮫島正道, 中村正二, 中村麻理子: 鹿児島島の陸生ヘビ類の分布と生態, *Nature of Kagoshima* 40, pp247-256 (2014)
- 10) 堺淳, 森口一, 鳥羽通久: フィールドワーカーのための毒蛇咬症ガイド, 爬虫両棲類学会報 2, pp75-92 (2002)
- 11) 深澤遊, 山下聡: 枯死木をめぐる生物間相互作用: 企画趣旨と今後の展望, *日本生態学会誌* 63, pp301-309 (2013)
- 12) 徳江義宏, 大澤啓志, 今村史子: 都市域のエコロジカルネットワーク計画における動物の移動分散の距離に関する考察, *日本緑化工学会誌* 37, pp203-206 (2011)
- 13) 門脇正史: 農業土木技術者のための生き物調査(その6) 爬虫類調査法, *農業土木学会誌* 71, pp141-145 (2003)

図2. 宮城学院女子大学構内で確認された爬虫類9種のうち8種の写真とその撮影場所を示す。シマヘビは構内で撮影した写真がないため記載しない。また、タカチホヘビについては幼体と成体両方の写真を記載した。

1. イシガメ科

1-1. ニホンイシガメ幼体 (こども園周囲)

2020年7月8日撮影



1-2. クサガメ幼体 (遊歩道の落葉の下)

2020年6月26日撮影



2. カナヘビ科

ニホンカナヘビ幼体 (遊歩道脇の樹上)

2020年5月2日撮影



3. タカチホヘビ科

3-1. タカチホヘビ幼体

(遊歩道脇、伐採されたコナラの樹皮下)

2020年7月13日撮影



3-2. タカチホヘビ成体

(遊歩道脇、伐採されたサクラ類の樹皮下)

2020年7月3日撮影



4. ナミヘビ科

4-1. ジムグリ幼体 (こども園脇の竹林)

2020年5月3日撮影



4-2. アオダイショウ幼体 (道路上)

2020年9月18日撮影



4-3. ヒバカリ成体 (遊歩道脇の沢)

2020年8月10日撮影



4-4. ヤマカガシ幼体 (遊歩道脇)

2020年5月27日撮影

